
1年生で挑戦して (法学部1年 山江海那)

私は今回、一橋からは唯一の大学1年生での参加者でした。この研修では、英文のレポートを書くというのに、大学生なりたての私は、日本語でもろくにレポートを書いたことがないばかりか、英語も特別出来る訳じゃないし、海外経験もほとんどありませんでした。そんな自分が果たしてこの研修をやり遂げられるのか、ダメもとで受けた面接に受かってしまったから、心の中は不安で一杯でした。

しかし、実際に向こうに行って生活しているうちに、そんな不安はいつしか消えていました。もちろん、全てが順風満帆だったという訳ではありません。苦勞もたくさんしました。でもそれ以上に得るものの大きい1ヶ月となりました。

授業はやはり、語学力の壁を強く感じました。ディスカッションは、当然ながら日常会話以上に高度な語彙が必要となります。日本語でまとめた意見を、電子辞書片手に英訳しているうちに、台湾や中国の学生が議論をどんどん進め、結局何も発言できない...といったことが多々ありました。時々、先生が気を使って話をふってくれ、そんな時は時間がかかっても、できるだけ自分の考えを丁寧に伝えられるよう努力しました。即興でうまく話せない分、スピーチの課題などが出た際には、出来るだけ時間をかけて準備するよう心掛けました。プログラムの後半からは、少しずつ自分からスムーズに意見を出せるようにもなりました。



懸念だった最終レポートとプレゼンに関しても、授業を進めていく中で、段階的に方法や技術を身につけられるようになっており、それぞれの提出日と発表日の前日こそ徹夜しましたが、最終的に仕上げることができました。

私は1ヶ月、いつも夜遅くまで起きていました。この理由は課題の量というより、自分のタイムマネジメント能力にあるでしょう。私は、コーディネーターが用意してくれたアクティビティに、

ほとんど全部参加しようと思いました。MLBや、遊園地、ビーチ、ボランティア、企業・NGO訪問... 他の人より課題に時間がかかるのはわかかっていても、それを理由にやりたいことを諦めるのは嫌だったので、睡眠時間を犠牲にする覚悟で楽しみました。日本の2~3倍くらいのサイズのレッドブルにはずいぶんお世話になりました。ただ、体調こそ崩さなかったものの、授業中睡魔に襲われてしまうことは問題でした。眠くなると特にリスニング力が落ちるので、授業についていけなくなってしまうからです。もっと上手く時間を使って、本質である授業を大切にすべきでした。

この他にも、大変なことはたくさんありました。もっと上手く英語が話せていたら、先生や他国の学生と、更に深い話が出来て、もっと仲良くなる事が出来ただろうと思います。しかし、私はあえて今年挑戦して良かったと思います。この研修は、この先の自分の大学生活を考える大きなきっかけとなりました。かけがえのない海外の友人、忘れられない思い出、英語を勉強する意欲、積極的に何かに挑戦することの意味、色々なものを私に与えてくれました。もし、英語力や海外経験を理由に参加を迷っている人がいたら、私はとりあえず挑戦してみることをお勧めしたいです。行ってしまえば、何とかあります。私のようにね。

**

EC (Effective Communication) クラス (社会学部2年 稲垣慶典)

ECクラスは、プレゼンテーションやアンケート・インタビューの方法、日常会話などを主に扱う授業です。プレゼンテーションの方法については、効果的に自分の主張を聴衆に伝えるための実用的なスキルを教わりました。また、スラングやイディオムなどの会話表現は、授業で習ってすぐ実際に使えたので、よく身に付いたと思います。

他方のTDクラスに比べると、ECクラスはとてもしラックスした授業でした。授業はグループワークや議論を中心としたものでしたが、堅苦しいものではなく、どちらかと言うとまるでおしゃべりのようでもありました。皆がそれぞれの意見を自発的に言える雰囲気があり、とても議論が盛り上がりました。また先生がとてもフレンドリーで、生徒一人一人を家族のように気にしてくれました。最後にはクラス全体がまるで家族のようになったと皆で言い合うほどでした。

一方で授業の厳しい面もありました。授業中に発言しない人は名指しでそのことを指摘されたり、プレゼンテーションの練習が足りていないととても低く評価されたりしました。そして、何よりも宿題や授業の準備をして来ないことは、授業の進行の妨げになるという意味で大きな減点になっていました。

宿題の量は少なくはありませんでしたが、計画的にやれば他のアクティビティに影響することはありませんでした。イディオムを覚えるというような単純なものから、グループワークまでいろいろありましたが、個人的にはインタビューの宿題が大変でした。見知らぬ人にインタビューをしてアンケートをとるというものでしたが、英語が上手く話せない上に、街頭アンケートの経験が全く



無かったのでとても苦勞しました。しかし、結果として最終レポートのアンケートを採る際に効率的に出来き、さらに英語を話す自信もついたのでとても良い経験になりました。

ALC を通じて様々なことを経験

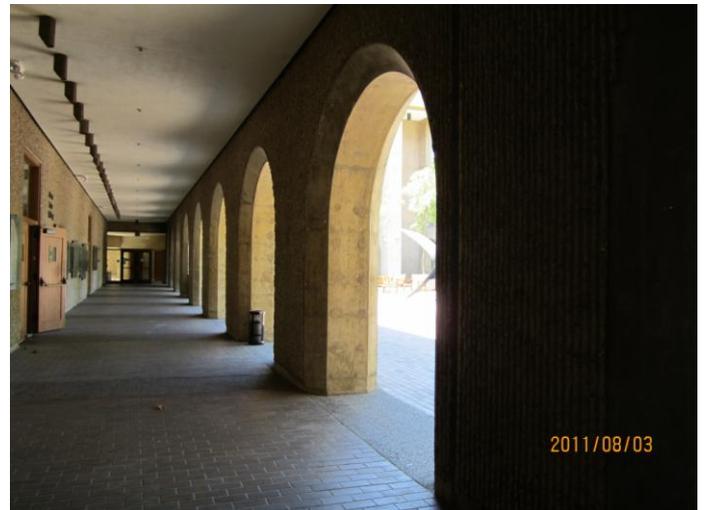
しましたが、EC クラスでの経験は自分に大きな影響を与えたものの一つです。先生がお話になった人生のアドバイスや台湾人や韓国人と英語で意見を交わしたこと、街頭インタビューをしたことなど、どれもが自分にとってかけがえのない経験となりました。

**

TD (Topic Development)について (法学部 2年 野崎晃代)

私にとってスタンフォード語学研修最大の難関といっても過言でもなかったのが、Topic Development (以下TD) の授業であった。TDでは、自分で決めたトピックについてリサーチペーパーを一つ書き上げることが目標である。担当教員によって様式は異なるが、いずれにせよ求められるクオリティは高い。それは、日本で書く「とりあえず英語で書けていればいい」レポートとは違い、根拠と理論に基づく一論文でなければならないからだ。

今回、私のグループ 6 を担当したのは Carolyn A Carr (以下キャロリン) であった。彼女はこのプログラム三年目のベテランであり、厳しいと評判の講師である。そしてその前評判は勿論正しかったのである。最初の授業時に、はきはきとした喋り方と笑顔で迎えてくれたキャロリンがまず私たち一人一人に渡したのは一通の手紙であった。それは一年前、同じ



2011/08/03

ように彼女が担当した生徒たちから私たちに宛てた手紙であり、「This class is really demanding. The most difficult thing is time management. But if you put every effort in it, you'll do great.」と私には書いてあったのである。



そしてその手紙のように、このクラスでは求められるものが極めて高かった。毎週分厚いプリントの束（鬱になるから計らなかったが、絶対に 2cm 近くはあると思われる）が配られ、毎週 2 つのテスト、リサーチペーパーに関する課題、ディスカッション等などである。やることは目白押しで、ちょっとでも気を抜くとすぐさまキャロリンから駄目だしされてしまった。

それでもやはり、TDは大変有意義で楽しかった。同じセクションの子達と積極的に議論し、国境を越えて交流できたのは同じ目標に向かって一ヶ月間頑張ったからだろう。「Trust me, trust me.」と何度も言ってきたキャロリンと、このプログラムを体験できる機会を与えてくれた Stanford 及び一橋大学の両大学に感謝したい。

ルームメイトについて（商学部 3 年 菅野 祐太）

■はじめに

1 ヶ月も友達と一緒に一つの部屋に暮らしたことはありますか？高校の時とかに寮生活をした人だったらあるかと思いますが、外国人の友人と 1 ヶ月一緒に住んだことがある人はまず居ないでしょう。海外語学研修@Stanford はこんな貴重な経験が出来る素晴らしいプログラムです。実は僕は、海外語学研修@UC Davis にも参加したことがあり、外国での長期（中期？）滞在は初めてではなかったのですが、ルームメイトがいる海外生活は別格です。Stanford の思い出の半分が共同生活だったと言ってもいいでしょう。

■私のルームメイト

海外語学研修@Stanford では、参加者全員がルームメイトを持ち、2 つのベッドと机しか無い部屋で 1 ヶ月暮らすことになります。ちなみに人数の関係上日本人がルームメイトノ場合もあります。僕のルームメイトは台湾人で、見た目がちょっと怖い 2 年生の Gary（台湾人はみんなイングリッシュネームを持っている）でした。台湾人グループは日本人に一日遅れてスタンフォードに到着し、最初に Gary と話したのは与えられた部屋の中でした。外国人のルームメイトと初対面と言うと、握手をして興奮気味に自己紹介しあう...って感じを僕は思い浮かべていましたが、トランクの中に入っていたシャンプーが大いにこぼれているのを発見した彼はいきなり不機嫌になり、自己紹介もそこそこにさっさと寝てしまった事を覚えています。でも、翌日からきちんと喋ってみると中々良い奴で、共通点も多く、すぐに打ち解けることが出来ました。

■ルームメイトがいる生活

Gary が同じクラス (Section6、たまたま一番上でした) だったため朝はお互いの目覚ましに起こされて、一緒に朝食を食べに行き余っていた宿題を一緒にやってからクラスに行くというのが定番でした。クラスが終わった午後は、何らかのアクティビティに参加していることが多かったためあまり部屋にいる時間は長くなく、夕飯を食べてから2人でだらだらと音楽をかけて宿題とかをしていたのを覚えています。お互い結構疲れた状態で1時くらいに床に就くのですが、電気を消した後に、



に、将来とか日本と台湾の関係とかの真面目な話や女の子の話など下らない話とかをしてから気づいていたら寝ているパターンが多かったです。今思えば、プログラムのコーディネーターはルームメイトを選ぶにあたって性格や趣味とかを熟慮してくれていたのだと思います。その結果多くの参加者がルームメイトとの親交を深めることができ、最後に空港のゲートで別れる際にはみんな号泣しすぎて

異常な雰囲気になっていました 笑

外国人のルームメイトがいることによって、部屋にいるときはもちろん英語で話すことになります。最初は意思疎通を図るのが難しい時もありましたが、さすがにずっといると相手が何を考えているのかが大体分かるようになり、円滑にコミュニケーションできるようになります。また、お互い英語を外国語として使っているのだからと思うとミスを恐れずに気軽にしゃべることが出来ました。共同生活が英語力の向上に果たした役割は計り知れません。

■帰国後

1日の1/3以上を一ヶ月間ルームメイトと一緒に過ごしていたので、帰国してからはしばらくはなんか変な感じがしていました。でも世の中は便利になったもので、Facebook や Skype で簡単に連絡を取り合うことができます。9月末には Gary が家に泊めてくれるのを頼りに単身台湾を半周してきました。彼の親のセカンドハウス (金持ち 笑) に2人で2泊した後、彼が車を運転して空港まで見送ってくれました。来年の1月に来日するらしいので、同じように家に泊めてあげようと考えています。ALC は帰国してからも友情関係が続くので、一生もののプログラムだと思います。

■まとめ

帰国後の参加者座談会でも多くの参加者がルームメイトとの共同生活に満足し、このプログラムの良いところとして挙げていました。1ヶ月も同じ人というとその人の性格はともかく、その人の母国の文化や慣習まで見えてきます。英語力の向上という意味でも共同生活は良いですが、アメリカに来たのに別の国の文化までも学べて親友が出来るというのがこのプログラムの貴重な点だと言えるでしょう。

スタンフォードでの食生活（経済学部2年武村 快）

これから留学を控える方の中には、寮の食事が不安だという方もいると思うので、現地での食生活について紹介したいと思います。

普段の食事は歩いて寮から15秒のカフェテリアで食べます。1日3食で食事はbuffet形式なので、自分の食べたい量だけ食べられます。ただし閉まるのは早いです（夕食は7時前に食べられなくなる）。典型的な夕食の例を挙げると、

主食 チキン(BBQ味) 付け合わせ (じゃがいも)
炒め物 (豆腐がよく入っている)
炭水化物 パスタ (バジル・トマト味)
米 (ピラフ)
野菜 サラダが数種類
果物 オレンジやグレープフルーツ、メロンにバナナ
ドリンク ジュースバー・牛乳・コーヒー
その他 ハンバーガー・ピザ



といったところでしょうか。メインの料理はバリエーションがあって毎日変わりますが、パスタやサラダ、果物はあまり変化がないため、食事に飽きてしまう人が多いです。私は平気なほうでしたが、それでも朝ごはんだけは辛かったです。2日に1度は同じパンがでてくるため、食欲も落ちます。

そこで、キャンパス内のレストランを積極的に利用するとよいと思います。教室までの道すがらにある **Coupa Cafe** で買ったサンドイッチやホットチョコレートを持って、朝のクラスに向かう人は結構います。キャンパス内には30を超えるレストランがあるので、そこでいつもと違う料理を食べるのもよいでしょう。私は **Tree House** というメキシコ料理店のブリトーが好きで、何度も通いました。

日本のものを食べる機会はありませんが、途中からbuffetでみそ汁や白いごはんを用意してくれました。また希望すればコーディネーターが車に乗せて外食に連れていってくれることもあります。アメリカで山頭火のラーメンを食べることになるとは思いませんでした。

アメリカの食事というと、アメリカンサイズという言葉があるように、たくさんあって食べきれないというイメージがありますが、1か月過ごしてみて、多すぎて食べられない、ということはありませんでした。全体として大味ですが、ハンバーガーは日本より絶対においしいです（カフェテリアのを除く）。逆にスイーツなどは、アメリカ人の好きな味付けは甘すぎると感じました。

最後に一点、ヨセミテに行くと食べ物のバリエーションが減り、物価も高いので、事前に食べ物と水を買いだめしておいてください。

**

企業訪問について（商学部4年 市川貴恵）

・はじめに

私がこの研修に参加したいと思ったきっかけは、「(あのジョブスが講演した) (あのラリー・ページとセルゲイ・ブリンを輩出した) スタンフォード大学に行ってみよう」「(米国 IT 企業の多くが拠点を置く) シリコンバレーに足を踏み入れてみたい」というミーハーな気持ちからでした。

したがって、企業訪問をとっても楽しみにしていました。プログラムに参加するための面接でもその点を強調しましたし、Google を訪問するために必要な志願書は至極真面目に書くなどして心残りがないようにしました。

・ Facebook の奇跡

ミーハーなので Facebook にも行っておきたいと思っていました。公式のアクティビティにはな



かったもので、空き時間を利用して他の学生と一緒に歩いてオフィスまで行きました。スタンフォード大学から Facebook オフィスまでは歩いていくことができます。

そこで、奇跡が起きました。玄関のまわりをうろうろしていたら、マーク・ザッカーバーグ氏本人がひとりでふらっと外に出てきたのです。私は死ぬほど興奮し、走って近寄って、”How are you?” と話しかけました。

普通に会話してくれて、握手までしてくれました。一般人の扱いに慣れているなという印象を受け

ました。私のような凡人がこのレベルの億万長者と握手する機会は早々ないので、とてもいい思い出でした。その時は、もうこの先一生手を洗いたくないと思うほど気持ちが高揚しました。

・ Google/YouTube/Apple

Google と YouTube 訪問は、プログラム正規のアクティビティにありました。どちらも (YouTube は Google 傘下ですが) 遊び心のあるオフィスで、イメージ通りといえばイメージ通りでした。ミーハーな学生にとっては夢のような企画ですが、インターンで得られそうなものを期待する学生からすると、物足りないかもしれません。

Apple は、ただ外からオフィスを眺めにいったのと、本社に併設されているおみやげの売店に行きました。

ここでアップルロゴの入ったおみやげを手に入れることができるので、興味のある方は行くといいかもしれません。余談ですが、私たちの年が、ジョブスが生存していた最後の年となりました。



・おわりに

マーク・ザッカーバーグに会えるかもしれない場所、それがシリコンバレー。そう思うとわくわくしませんか。

観光—Stanford、Palo Alto、San Francisco— (商学部2年 久保雄麻)

毎日が雲一つない青空で、20時半頃まで陽光眩しいスタンフォード。キャンパスには、緑があふれ、野生のリスに出くわすこともしばしば。赤い瓦屋根と白い石壁が特徴的でどこかスペイン風な建物群と、誰もが知る企業家たちより寄贈された近代的なビルディング。それらすべてが調和し、青空とおりなす鮮やかなコントラスト。きっと、まずその圧倒的スケールの美しいキャンパスに衝撃を受けるでしょう。その敷地は東京ディズニーリゾートの33倍ほどもあるらしく、周辺を結ぶ無料巡回バスも利用できます。ここには全米はもとより、世界各地から毎日数多くの観光客が訪れ、学生によるビジター向けのキャンパスツアーも毎日行われています。Book Center で



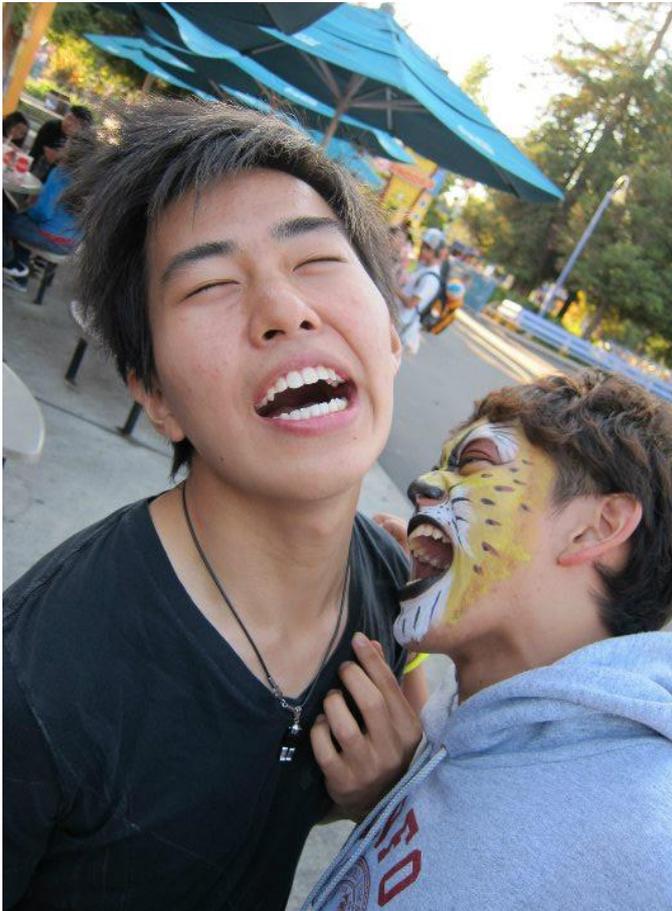
は、毎週次々と新しい大学グッズがリリースされ、レジの列は決して途切れません。主な見所は、シンボルのフーバー・タワー、洗練されたスタンフォードショッピングセンター、アートギャラリー、そしてNHK「スタンフォード白熱教室」のOPでも見覚えある中心部 Main Quad のアーチと教室の回廊と教会広場。ジョブズゆかりのパロアルト研究所やジムでのロッククライミング、ゴルフ場

での打ちっぱなし体験もオススメです。

次は、パロアルト。そもそもスタンフォードもパロアルトの一部ですが、この地域はシリコンバレーの中心にあるため散歩に行くような距離に世界にその名を轟かす IT 企業の本部やその縁の地があります。もしかしたら、道端で信じられない様なビッグネームに出くわすこともあるかも知れません。ダウンタウンはスタンフォードの Main Quad から、芝生広場 Oval をぬけてまっすぐ北に 2 マイルほどです。日本の表参道をさらにアメリカンテイストにしたような通り沿いには、ジャズが流れ、おしゃれなイタリアンやカフェ、雑貨屋、インテリアショップ、日本料理店もいくつもあります。雑貨屋さんでオススメのレストランを聴いてみたりすると親切に教えてくれます。バスや自転車で気軽に足を伸ばせるので午後から買い物や食事、映画にと様々な機会を訪れることができるでしょう。

最後は、サンフランシスコ。ここへは、Caltrain の Palo Alto 駅から一時間ほど。交通網が発達した北カリフォルニア一番の都市ですが、比較的小さく、

歩いてまわることもできます。いくつもの定番スポットがあります。坂が多くゴールデンゲートブリッジとケーブルカーの町のシンボルです。他にも、海沿いの観光地フィッシャーマンズワーフで、散策やクラムチャウダーや野生のアシカ、また、そのピア 33 から船のみでアクセスできるアルカトラズ島も必見です。ユニオンスクエア周辺にはケーブルカーや電車の起点がありデパート、レストランなんでも揃っています。近所には、チャイナタウンや有名な教会もあります。他にも、アラモスクウェア、ロンバードストリート、アメリカのゲイ文化の中心地カストロ、科学アカデミーなども面白いのではないのでしょうか。ディズニーファンであれば、ウォルトディズニーファミリーミュージアムもあります。何れにしても、コーディネーターとまわる、最初の週末のサンフランシスコ観光までに情報を集め、いろいろ教えてもらってから、何度も足を運んでみるのが一番だと思います。



ヨセミテ・フィールドトリップ（商学部2年 白杵里恵）

Stanford での成績表を受け取り、慌ただしく荷物を詰め込んだら、一度空港近くのホテルにスーツケースを置いて一泊。そして翌朝には、このプログラムの最後の楽しみ、課題も何もないヨセミテ国立公園でのフィールドトリップへの出発です。バスで5時間。荒野の真ん中に突然、切り立っ



た岩のような山と緑の森が現れます。私達は定員4人の大きなテントに泊まりました。ここでは夜は真っ暗になるので懐中電灯は必需品。リスや鹿があちこちを歩き回り、クマ対策のために食べ物はロッカーに入れておかなければいけません。しかし、全員参加のプログラムは基本的には無いので朝から晩まで各々自由に自然を満喫することができます。コーディネーターが何種類かのハイキング、マウンテンバイク、カヤック、ロッククライミングや乗馬などのコースを提案・引率してくれるほか、公園の中心部を回るバスに乗って友達と出かける人も。ちなみに川は本当に穏やかなので、カヤックといってもボートを漕ぐような感覚で、互いにオールで水を掛け合ったり、浅瀬ではカヤックを降りて泳いだり、といった具合でした。ハイキングはかかる時間によって3種類が用意されていて、最も長いコースでは頂上からヨセミテの谷の全景を見渡すことができました。思いがけず皆でクマに追いかけられたのも、今は

いい思い出です。

また、私達が泊まったところからバスで行くことができる Ahwahnee Hotel というホテルはステイブ・ジョブズも結婚式を挙げたところで、ここ的高级なレストランに自分で予約して食べに行った友達もいました。夜には多くの人が星を見に、森がひらけたところまで行き、戻ってきた後は（ある時間を過ぎるとテントの中では静かにしなければならないので）テントから離れたところに多くの人が集まり、夜中までお喋りをしました。皆で過ごす最後のアクティビティ、プログラムの最後に最高の思い出をつくることができ本当によかったです。

寮生活の良いところ（経済学部2年 水村 健）

寮生活で一番良かった点はみんなが一日中、共有して使えるラウンジがあったということです。ラウンジにはソファとテーブルはもちろん、ピアノ・ビリヤード台・サッカーゲーム台などさまざまなものがおいてあり、みんなが常に話し、遊び、交流することができるスペースがつくられていました。また、ラウンジにはキッチンもあり、休日の昼間にクッキーを一緒に作ったり、夜中にインスタントヌードルを作ったりすることができました。あんなに大勢が一つの空間で同じ時間を共有することができるのはとても貴重なことだと思います。ラウンジでは、その日の英語の宿題やプレゼンテーションの準備をする友達が多く、みんなで様々なことを話しながら作業をする時間は一日の中でとても充実した時間でした。私はラウンジで宿題をやる、いわゆるラウンジ族でしたのでいつもラウンジにおり、そのおかげで他国の友達とより多く話す機会に恵まれたと思います。12時をすぎても、ともに同じソファに座って作業をしたり、お互いのことを話したり、パソコンで遊んだりすることが寮生活の大部分をしめていたことは、振り返ってみて本当に良かったと思います。深い国際交流は身近なところから始まるのだという実感をもてました。自分の部屋で集中して勉強するのも勿論大切ですが、ラウンジでサッカーゲームをしたり、一緒にラーメンを食べたりなど、寮でしか味わえない共同生活をふんだんに楽しむことがこの留学の肝だと思います！ラウンジで色々な人と話し、理解し、一人一人との関係を深めていくことはこの留学でとても貴重な経験となりました。ホームステイでは味わえない、仲間との貴重な時間の共有が寮生活の魅力であると思います。



Taiwanese Night and Japanese Night (社会学部 2年 石原史章)

American Language Program、通称 ALC で学ぶのはアメリカのカルチャーや言語だけではないのです。参加した学生らが自らの手で母国を紹介するという、なんとも国際的なイベントがあるからです。例えば、台湾人が企画した **Taiwanese Night** では、台湾のジェネラルインフォメーションを学び、彼らが作った台湾料理を食べ

(寮の食事に飽き飽きしていた僕らには、これがまたうまい!!)、そして台湾版のマルマルモリモリ?のダンスをみっちり練習させられ、そして最後にみんなでゲームを楽しみ交流を深めました。**Taiwanese Night** は ALC1・ALC2 合同企画であったため、雰囲気の違いに驚いた人も多いでしょう。今回の **Taiwanese Night** は ALC1 の台湾人が中心となって企画したので、「ALC1 のノリ」に直面した ALC2 はなす術もなく飲み込まれて行きました・・・。



負けてはいられない僕ら日本人。本格的に **Japanese Night** の企画を検討することに。しかし、一言で文化を紹介するといっても、「言うは易く行は難し」。一体何をすればよいのやら。実は僕たち日本人自身も日本文化を真剣に考えたこともなく、具体的には答えを見いだせませんでした。そこで自分たちに身近な「日本の大学生の文化」を紹介することを中心とし、日本の「今」をしてみよう **Japanese Night** を企画しました。まずはちょっとした日本語講座と、日本の大学生の一日をとりあげ (〇時起床～満員電車～授業～サークル～バイトなど) プレゼン。そしてもうひとつ、日本の大学生の文化といえる「コール」に関するプレゼンと実演。ALC プログラム中はアルコール禁止なので、カフェテリアからもらってきたソフトドリンクでコールという一見シュールな光景が広がるが受けは抜群でした (笑)。そして会場のボルテージがマックスに上がったところでダンスショーのスタート。女子チームと男子チームの 2 チームが、夜な夜な練習に練習を重ねて完成度の高いダンスを披露します。踊る曲は女子が AKB48、なんと男子も AKB48 しかも女装して (笑) 大爆笑を勝ち得たのは言うまでもない。その後、「きもい」男たちと写真をとるために殺到する 1 カ月を共に過ごした仲間たち。そしてラストに、日本料理のフルコース、といっても、お好み焼きや豚汁など庶民的ですが、れっきとした日本料理を食べ、しばしの談笑。いつのまにか固い絆で結ばれていることを改めて実感した最高の 1 日でした。

寮での生活（商学部2年 寺西 藍）

寮ではだいたい違う国の人と二人部屋になり、基本的に部屋にいる人、よくラウンジに出てくる人がいました。私は宿題をする時は自分の部屋で、それ以外の時はラウンジにでて、いろんな人と話すように心がけていました。部屋にいる時なるべくドアを開けておいて、気軽に他の人が部屋に来やすくなるようにしようという「オープンドアポリシー」というものがあり、そうするようにしていました。おかげで、いつも前を通る人が部屋に寄ってくれ、ルームメイト以外にも仲の良い友達がたくさんできました。スタンフォードでは自由な時間がたくさんあり、特に夜はアクティビティもほとんどないので、宿題を早く終わらせ、台湾の子やコーディネーターと話していることが多かったです。昼と違い夜は、みんなでワイワイというより、比較的少人数で深い話をしていたので、絆も深くなり、そういった会話から英語力も向上していった気がします。部屋に戻ってしまっても、Facebookのチャットで、「話そう！」ということになり、深夜にラウンジにでて話したことも何度かありました。授業も大切ですが、寮やアクティビティなど日常生活の方が、英語力を鍛えられたと思います。ただ、そうやって夜中まで話したりすることもあったせいか、日中眠くなることもあったので、そのあたりを上手く考えてタイムマネジメントをすることも大切だと思いました。



寮では様々なスタンフォードの伝統的行事(!?)を体験しました。中でも一番印象的だったのが、スタンフォードでは誕生日を迎えた人をシャワーに連れて行き、水をかけるというどっきりが行われるそうで、私たちも実際に8月が誕生日の人は水をかけられ、みんなでお祝いしました。ラウンジにいと「バスケットに行こう！」とか「パロアルトに行こう！」など誘われたりしました。夜比較的早く部屋に戻ってしまうと、そういった告知されていないアクティビティを知らずに参加できないので、やはり私はできる限りラウンジやロビーなどみんながいるところにいることをお勧めします。

朝起きてから夜寝るまで、学校でも寮でもダウンタウンでもたくさんの楽しいことが経験でき、かつ英語力も上がったので、とても素晴らしい夏になりました。

**

コーディネーターについて（経済学部2年 安部匠悟）

スタンフォードでの生活で常に私たちをサポートして一緒に行動してくれるのがコーディネーターと呼ばれる現地の学生です。コーディネーターとは同じ寮で同じように生活し、向こうでの体験の多くを共有します。彼らは私たちのために数々の企業訪問やディスカッションパネル、日々のイベントといったとても多くのことを準備し計画してくれますし、やはりスタンフォードの学生だけあってみんなとてつもなく頭がよく、また学力だけでなく音楽やスポーツといった一芸にも秀でていて、本当に素晴らしい人たちです。



けれど、それでいてなにか雲の上のような人たちというわけではなく、やはり彼らも普通の大学生で、ばかなことやって騒ぐのが大好きでイベント好きでパーティー好きなアメリカの大学生です。宿題に追われて夜遅くまで寮のラウンジで課題をやっていると「気分転換に甘いもの食べに行こうぜ」とコーディネーターに誘われ、彼らの車にみんなで乗り込んで爆音で音楽を流しながらパーティー気分です。ドーナツ屋さんまでドライブして結局課題をやりそこねたり、夜中にコーディネーターと wii sports で白熱

した試合を繰り返して過ぎて次の日の朝に寝坊してクラスに遅刻しそうになったりと、とにかく楽しいこと大好きな人たちで、一緒にいて退屈することはありませんでした。ここには書けないあんなことやこともたくさんあり、もうとにかく彼らは最高です。そしてなによりそういった体験を通して仲良くなったコーディネーターとの仲はプログラムが終わってからも切れることはなく、何人ものコーディネーターがプログラム後に日本に遊びに来てくれています。逆に私自身も、このプログラムで知り合った友達と一緒に春休みにスタンフォードをもう一度訪れて、彼らといろいろ遊ぼうと計画しています。このプログラムの強みは、台湾や中国からの学生ともそうですが、そういった海外の学生と強いきずなや関係を築けることにあると思います。

Company Visit（経済学部4年 山本航平）

初めまして。私はこのレポートで、スタンフォード研修の中での企業訪問の経験について書かせて頂きたいと思います。

企業訪問とは、課外活動の一環でスタンフォード周辺の企業を訪れ、オフィスを実際に見学して回り、社員の方々と話す機会が得られるものです。やはり Google などの人気企業には学生の人気に殺到するために、人気企業の訪問にあたっては事前にショートエッセイが課され、それに通った人だけが行けるというシステムになっています。ただ、なるべく全員に平等に機会が与えられるよう配慮されています。スタンフォードはシリコンバレーの中心に位置しているため、Google、Apple、Facebookをはじめとした IT 企業を訪れるには絶好の場所です(Facebook の本社は寮から徒歩 15 分の位置にあり、友人は偶然にも CEO であるマークザッカーバーグに遭遇しました!)。やはり授業だけでなく、実際に現地の企業を訪れてビジネスの現場を知ると言う経験は他では得られないものであり、この研修の醍醐味の 1 つであると思います。僕自身も IT 業界やスタートアップ(起業)に興味があったので、シリコンバレーの企業を訪れた経験は今でも自分の仕事観や価値観に大きく影響を与えたと感じています。僕は Google と Box.net の 2 社を訪問しました。



まず Google ですが、有名な素晴らしい社内環境は大変印象的なものでした。フリードリンク、フリーフードはもちろん、広大な社内にはバレーコートや卓球場など社員がリラックスするスペースが完備されています。また社員は Google 社員専用の自転車で会社の敷地を移動し、ミーティングしやすいように至る所にホワイトボードが設置してあります。中にはバランスボールに乗ったまま仕事をしている人も見かけました。さらに驚いたのは、当日案内して頂いた社員の方は自分よりたった 1 つしか年齢が変わらないのに、既に Gmail におけるファイナンス担当として活躍している人でした。僕も来年から同じようにアメリカの会社でファイナンス担当になるということで大いに刺激を受けました。次に Box.net ですが、DropBox のようなクラウドサービスを提供している、いわゆるガレッジベンチャーです。社員もまだ 200 人くらいなのですが、数年後に上場を目指しているということで、アイビーリーグの学生や Google、Apple のような会社から人材を引き抜いて凄い勢いで成長しているようでした。Google のような大企業とは違い、シリコンバレーのベンチャー企業がどのような雰囲気で行っているのか垣間見る事ができ、こちらも非常に良い経験となりました。

企業訪問という意味では、プログラムされたものだけでなく、個人的にスペアタイムを使って色々と訪れることも可能だと思います。僕自身も Apple や Evernote などには個人的にアポイントを取って訪問することができ、そこで働く日本人の方にシリコンバレーについての話やアメリカで働くことについて話を伺う事が出来ました。いずれにせよ、普段だと見る事が出来ない、シリコンバレーの企業の中身を知ることができる貴重なプログラムなので、是非研修に参加された場合は色々と企業訪問に行ってみることをお勧めします。

サンフランシスコ観光（社会学部2年 岡崎直人）

スタンフォードはご存じの通りカリフォルニア州にあります。スタンフォード近辺で観光というよりはサンフランシスコになります。Stanford に到着して最初の週末にコーディネーターたちの案内のもとにサンフランシスコを一通り回りますが、なにせ日本の一般的な観光地と比べても圧倒的に広い。またインフラも日本ほどには（あくまで日本の都心と比べての話ですが…）張り巡らされているとは言えないので、一日ですべての観光名所をじっくり回るのは不可能です。そのため、そこで十分にサンフランシスコを回れたと感じなかった人は後から個人的にサンフランシスコに繰り出すこととなります。

僕は個人的に、たまたま同じタイミングで日本からカリフォルニアに留学に来ていた友人と別の週末を利用してサンフランシスコ巡りを敢行したり、寮の日本人や韓国人と一緒に土産や買い物目的でサンフランシスコを訪れたりしました。スタンフォードでは一応授業日でも午後は自由時間がありますが、様々なイベントがある上に、サンフランシスコまで行くために使用する Caltrain という電車の駅まで結構距離があったり、終電も日本と比べて早めなのでそこまで頻りにサンフランシスコまで行くということは難しいと思います。（中には頻りに行っているひともいましたが…）ですが Caltrain の最寄駅のある Palo Alto という町にもレストランなどのお店がたくさんあったのでそっちで用をすますことも多かったです。

これまでも言及しましたが、サンフランシスコは広いうえに見るべきところもたくさんあるので飽きることはありませんでしたし、サンフランシスコの中心部では、日本語を話す店員さんのいるお店もあって店に入ると「いらっしゃいませー」などという言葉が飛んで来たりしてびっくりしたりもしました。逆に注意点としては、とにかく坂が多く観光地から観光地まで歩いたりすると結構疲れるのと、海の近くなので風が強く夜はかなり冷えるので服装には気を付けた方がいいと思います。また Caltrain がくせもので、車内放送は聞き取り辛いし、駅のホームに基本的に駅名の表示がないので気を付けていないと乗り過ごしそうになったりもしました。

スタンフォード研修（TD/EC クラスについて） 商学部2年 川村洸太郎

自分は2011年8月のスタンフォード研修に参加させてもらいました。自分からは研修中に行われていた授業（TD/EC クラス）について話させていただきます。



スタンフォード研修の中では毎朝 3 時間、英語の授業があります。英語と言っても、高校や大学のような教科書を読んで、訳をとってといったものとは全く異なります。具体的に話すと、まず授業は 2 つの最終課題のために構成されています。1 つはアメリカ文化に関するレポート、もう 1 つはそのレポートのプレゼン発表です。このふたつを同時並行で準備していくのですが、そのために用意されているのが TD クラスと EC クラスです。

TD クラスではレポートのトピック選

び、情報源探し、引用文の使い方、レポートの構成といったことを学んでいきます。最初のころは簡単な引用文の例を用いて書き方の練習をしていきました。次に英語の参考資料を探して、内容を確認した後で引用文のかたちにはめていきます。この資料探しがなかなか苦戦するところでした。コーディネーター（留学生のお世話をしてくれるスタンフォードの学生）が手伝ってくれることもあったり、なかったりでした。資料を整え、引用文の形を覚えるといよいよレポート作成です。EC クラスで作ったデータと合わせて構成を練っていきます。本文はもちろんですが、表紙や、参考文献、データ採取のためのアンケート表まですべて 1 つにまとめて提出します。日本の大学の授業



ではなかなかいほどしっかりとまとめて 1 冊のレポートにするので、提出するときは少し緊張しました。

さて、次は EC クラスです。EC クラスでは、TD クラスの引用文練習や情報源探しと並行してプレゼン・データ採取の練習をしていきます。EC クラスの最大の課題と言えばやはり聞き込み調査でしょう。スタンフォード大学内にいる学生、地域住民、サンフランシスコの観光客などあらゆる人に、アンケートを持っていき質問をします。もちろんすべて英語です。そこでデータを集めると、あとはレポートの内容をパワーポイントに起こす作業になります。持ち時間 10 分の中、英語で自分のレポートを紹介していきます。中間発表とあわせて 2 回発表



。持ち時間 10 分の中、英語で自分のレポートを紹介していきます。中間発表とあわせて 2 回発表

を行います。

このように、レポート、プレゼンを同時並行で練習していきます。個人的には聞き込み調査がとても楽しい思い出となりました。

**

コーディネーター（商学部4年 井浦麻子）

ALC1、2ともに7人のスタンフォードの学生がコーディネーターとして私達の世話全般を全て行ってくれました。学生といっても、1年生で19歳になったばかりの子もいれば、卒業生としてすでに学部生ではない子もいて、年齢・バックグラウンドは多様でした。しかし一言に言えたことは、自分の好きなことが本当にたくさんあって、そのどれもが一流であることでした。例えば、あるアンドリューという男の子はすでにスタンフォードを卒業しており、10月からシンガポールで英語の先生として働いているのですが、彼はパソコンを用いて作曲し、チェロでそれを演奏し、録音して楽しんでいました。それだけでなく、野球観戦が好きで、ジャイアンツについて本当に詳しくグッズもたくさん持っていて、プログラム中に行った野球観戦の準備も積極的に行っていました。またサッカーも好きで、ALCで希望者を募って本格的なワールドカップを開催しました。各チームに女子と異なる国籍の参加者が含まれることを条件としてトーナメント戦を行い、ALC1と2の優勝チームで決勝戦を行ったのですが、毎日試合が終わる

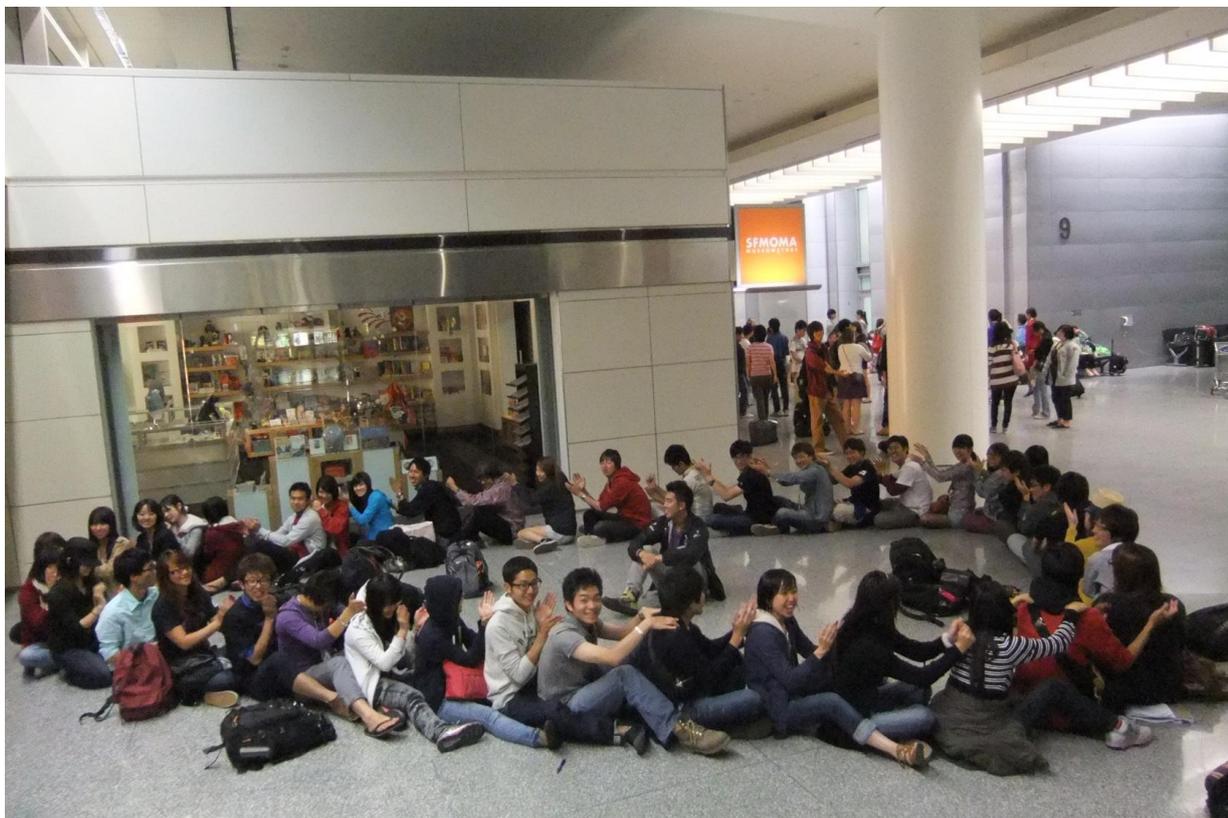


とその日の詳細な新聞を書いてラウンジに貼っていました。彼の趣味についても全てを書くには余白が全然足りません。

それ位みんな多才で努力かなのですが、本当に純粋で、献身的に私達の世話をしてくれる姿には驚かされるばかりでした。ALC1だけでも全部で70人以上の参加者がおり、全員



をまとめるのは至難の技だったと思いますが、毎日私達の要望を聞き入れてどこかへ連れて行って
くれたり、イベントを企画してくれたり、宿題を手伝ってくれたり…。もちろん参加者が到着する
前に寮の雑貨搬入や装飾をして待っていてくれたのも彼らでした。最後出国するときは寂しさのあ
まり涙が止まりませんでした。英語という外国語を拙いながらも必死に伝えようとしている私達の
言葉を一生懸命理解しようとしてくれ、一ヶ月間毎日言葉を交わすことで、本当に家族のようにな
りました。そしてもっと英語を話せるようになって、彼らともっとわかり合いたい、と強く思って
帰国した参加者ばかりだったと思います。また日本に住んでいたことがあったり、勉強していたり
するコーディネーターも多かったので、彼らと交わす日本語の会話も楽しかったです。変な言葉教



え合ったり（笑）本当に素敵な人たちばかりで、これからもずっと連絡を取り合っていきたいと思
っています。